

11. 紫金山（しきんざん）古墳

紫金山古墳は、大阪府茨木市の丘陵上に造られた古墳時代前期中頃の前方後円墳です。墳丘の長さは 100m で、後円部に大きな割り貫き式の木棺を納めた長大な竪穴式石室（たてあなしきせきしつ）があります。

副葬品には、鏡や甲冑・武器・農工具・腕輪形石製品などがあります。

三角縁神獸鏡は、縁の断面が三角形になっていること、中国の神仙思想に基づく神様と神様をまもる獣の文様があることから付けられた名前です。卑弥呼が魏の皇帝から下賜された銅鏡 100 枚は三角縁神獸鏡との考え方もありますが、この古墳出土のものは日本で作られたと考えられているものも含まれています。このほか、ひときわ大きな鏡は、勾玉文帯神獸鏡といわれるもので、直径約 36 センチもあり、古墳時代では最大級の鏡です。

腕輪形石製品は、古墳時代前期後半の代表的な遺物です。もとをたどれば、弥生時代に流行した奄美大島以南の南海産の貝輪が変化したものです。この古墳からは、その原形となったゴホウラの貝輪も出土しています。

このほか、出土した甲冑は、日本列島における初現期の鉄製甲冑の重要な資料です。また、鉄剣・鉄刀・鉄鏃などの武器類や、鉄斧（てつおの）・鉄鋸（てつこのこ）・鉄鑿（てつのみ）などの工具類、鉄鍬（てつぐわ）などの農具など多数の鉄製品が出土しています。

紫金山古墳は、近畿地方の古墳時代前期を代表する古墳の一つです。